
赤い混沌と赤い裁判

中陳 稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い混沌と赤い裁判

【Nコード】

N3512E

【作者名】

中陳 秤

【あらすじ】

突然、メールが届いた。高校時代の友達からだった。久しぶりのメールで嬉しかった。でも、その嬉しさは青天の霹靂によって、崩された。音を立てて……。

第一話：赤い悪感

つまらないことには、もう関係したくないと思っている。
くだらないことには、もう関与したくないと思っている。
飽きがくることには、もう近接したくないと思っている。
最低最悪なことには、もう接近したくないと思っている。



毎日、たわ言のような暴言を吐き、頭の天辺から足の爪先までを倦怠させ、もはや、一ミリたりとも動きたくないような衝動に駆られることがある。稼働停止。もう、全てのスイッチを切って、全てのことから逃げたかった。それは、生きていることが嫌であるということを意味しているわけではなく、生きているけれども、抜け殻同然のようになりたかったただけだ。それが、私にとってどれだけ意義があることか、周りは理解してくれない。別にいいのだ。非常識で不親切で無神経で未解決なこの問題は、私一人だけのことにして欲しいし、誰にも関わって欲しくないし、近寄って欲しいとも思わない。

なんてね――。

そんなことはいってみても、暴言はどれだけでも吐けるよ。誹謗、中傷、拳句の果てには猥褻なことだって平気で言える自信（こんなこと、自慢にはならないが、自信に繋がる）はある。ただ、本当に今は誰にも関わりたくないし、近寄りたくない。人間不信というわけではないが、しばらくの間は一人にして欲しい。

ついさっきまで泣いていた。枕をビショビショに濡らすほど、大声を上げて泣いた。部屋にその鳴咽はこだまし、全ての悲しみをなぎ払おうとしていた。それだけで悲しみが晴れるわけもなく、ただただ、長い時間をかけて泣いていた。久しぶりに泣いた。大声を上

げて泣いた。それまで泣いていたといえば、転んだとか、可愛がっていた犬が事故に遭って死んだとか、そういう「不慮の事故」で泣いていた。

部屋に入ってから三時間。電話は来ない。メールも来ない。ドアもノックされないし、部屋の外からの呼びかけも無い。すでに、涙は枯れ果てた。

最後に電話がなったのは今から四時間前のことだった。メールが携帯に届いていた。一週間に四通来るか来ないかのメール。久しぶりのことだったので慌てて携帯を確認した。相手は同じ高校に通っていたクラスメイト——ユウちゃんだった。何年ぶりだろう。

ユウちゃんは可愛くて、真面目で成績優秀。クラス委員にはならなかったものの、文化祭実行委員長として、今までに無いくらい文化祭を盛り上げていた子。吹奏楽部でフルートを担当していた彼女は後輩のみならず、同級生からも慕われていた。そんな子と私は仲良くしていた。あまりに恐れ多くて、周りから嫉妬されるんじゃないかなんて思っていた。それほど、ユウちゃんは皆から好かれていた。信頼されていた。私はそんなユウちゃんが羨ましかった。ユウちゃんのようにになりたい。そんな風に思っていた。

そんなユウちゃんからのメール……なんだろう。と思い。早速開けてみる。

――。

青天の霹靂というのはこういうことを言うのだろうか。今まで雲ひとつ無かった青空に突如として暗雲が立ち込め、轟音の雷と滝のような雨が降ったような。そんな雰囲気させるような内容を疑った。——内容というよりも、そこにあった一枚の写真を疑った。

むしろ、メールには一文字もなく、そこには一枚の写真しかなかった。

携帯の画面に広がるその写真。怖いけれど、目を背くことが出来なかった。目を背けることを体が拒否した。

心では部屋の白い壁が見たいと思っているのに、体が動かなかった。

動けなかった。

何も出来なかった。

ただ、その写真を食い入るように見るしかなかった。そして、その写真を凝視したことを悔やむしかなかった。その瞬間は泣こうにも泣けなかった。

心が動転してしまつて、壁が見たいのと、何だこれはという二つのことが心の中で糸のように纏れ合っていた。

その写真。今にしてみれば、吐きそうなくらいに気持ち悪かった。そこには、赤い色が中心となっていた。そこに写っているのはユウちゃんであることには間違いない。

ただ、普通ではなかった。異常だった。

ユウちゃんは黒い髪を掴まれて、何者かに持たれていた。赤い。そこではじめて知ったのは、ユウちゃんの顔が大きく写っているが、後ろには体のようなものが見えていた。赤い——ピントが合っていない。多少ぼやけてはいたが、それが人間の体であることは分っていた。赤い。白いノースリーブを着た、体。その体がユウちゃんの体であることが分ったのは、肩にあつた大きな傷痕が見えたからだ。ぼやけていてもはっきりその傷痕は分かる。

——ユウちゃんは小さい頃、虐待を受けていた。

血の繋がりの無い男に、殴られ、撲られ、蹴られ、踏まれ、切られ、斬られ、弄られ、弄ばれ——保護された。

強い心の傷を負った。

可哀想な子だった。

男は逮捕された。お母さんは逃避した拳句に死んだ。

高校時代はいつも笑顔で、皆から好かれていたし、信頼されていた。だけど、過去は暗く、惨めで、傷だらけの毎日だった。

中学も半分以上欠席したけれど、ユウちゃんは後に優しい親戚に

引き取られ、一生懸命勉強をした。

中学入学当初から中学三年の二学期初めまで登校拒否をしていたけど、中学三年になってから半年で中学の二年までの勉強を終えるほど、猛勉強した。

何で、あんな境遇にあったのにそこまで頑張れるのか、理解が来なかった。体に傷は残っているけど、心の傷はどうなんだろうと、ユウちゃんと仲良くしていても思っていた。聞こうにも、そんな野暮なことは聞けない。聞いちゃいけない。禁忌だ。でも、時々、そんな幼いころにつけられた肩の傷痕を見て泣いていることがあった。やっぱり、心の傷は完全には癒えないんだろう。

赤くて紅くて朱くて丹い写真。ユウちゃんが――苦悶の表情のユウちゃんがいる。赤い。体が後ろにあって、写真に大きくユウちゃんの顔。人間の首はそんなに長くない。ユウちゃん。一体、どうしちゃったんだろう。何がどうしてどうなっているか、私は最初、全然分からなかった。

ようやく理解できた頃、私は、枕に顔をうずめて大きな声で泣いた。ユウちゃん……。どうして？

警察に連絡しようと思ったけど、出来なかった。体は大きく震えて、目からは涙が止まらなくて、大声を止められなくて。怖かった。悲しかった。恐かった。哀しかった。

混乱していた。混沌としていた。混雑していた。混迷していた。何もかもが無秩序で無軌道だった。私は私を制御できずにいた。

第二話：赤い悲観

あの子とあいつが会ってから、あの子は一気に崩された。
あの子とあいつが話してから、あの子は一気に汚された。
あの子とあいつが暮してから、あの子は一気に傷ついた。
あの子とあいつが離れてから、あの子は一気に煌めいた。
あの子とあいつが再開したら、あの子は一気に……。

□ □ □

あの写真から判断できたことは、ユウちゃんは殺されたということと、殺した犯人の性別が男であることだった。

ユウちゃんの顔と体。そのユウちゃんの頭を持っていた手は毛深く、大きく、明らかに男の手であったことから、二つの予想は付いた。しかし、ユウちゃんを殺した犯人が分からなかった。一体、誰があんな酷いことをしたのだろう。

私はユウちゃんの家へ行ってみることにした。つまり、ユウちゃんの親戚の家だ。高校時代に何回か遊びにいったことがある。引越していない限り、行けば何か分かるかもしれない。

私は、一時的に涙を止めた。人間、何かをやらなくてはならないとき、ある程度の制御が出来るらしい。——の決断が出来た私はもはや、自分でも止められなかった。涙をとめることは出来てもその衝動は止まらないらしい。後悔しなければ良いぐらいにしか思わなかった——いや、絶対に後悔しないという自信のもと動いたのかもしれない。

私は外に出た。まずは、最寄の駅へ向かう。高校では仲良くしていたが、ユウちゃんの家は遠く、電車を乗り継いでいかなければならない。だから、お互いの家へいくのは滅多に無かった。泊まりに行ったこともあったが、一度きりだった。

最寄り駅から電車に乗る。その時気づかなかったが、私はショルダーバッグを持っていた。そのバッグの中には——と携帯が入っている。他には何もない。その二つだけがあれば十分だったように思う。ずっしりと重い——と、あの忌々しい写真の保存されている赤い携帯。その携帯でさえも重く感じた。それだけ、あの写真は惨く、酷く、残忍な物だったのだ。

電車の窓から見える景色は、自分の目に入るものの、何も感じさせなかった。

中吊りの広告は、自分の目に入るものの、何も感じさせなかった。自分の荷物は、自分で管理しているものの、何を感じさせたのかからない。

ただ、そこには「恒常」の物体が二つあるだけとしか考えていなかったのか、——をどう使おうとかしか考えていなかったのか、それが私の中では混沌としていた。

電車に揺られること十五分。ようやく、ユウちゃんの家の最寄り駅に着いた。そこからは自然と足は動いていた。私の意思とは関係なく、意志だけで動いていた。バッグの中からは「恒常」同士がぶつかる音が聞こえていた。

ユウちゃんの家は大きい。初めて行った日もそんなことを思った。表札が掲げてあった。「片里^{かたさと}」という表札。

親戚に引き取られたユウちゃんは——片里悠美^{かたさとゆうみ}となった。それまでの名前は捨てたという。だから、中学三年以前の名前は分からない。苗字も名前も違うかもしれない。でも、私の中では昔も今も同じ「片里悠美」——ユウちゃんではなかった。どんな過去があるうとも、どんな境遇にあるうとも、ユウちゃんはユウちゃんではない。

インターホンを押す。すると、

「はい」

と女性の声が聞こえた。この声は聞き覚えがある。ユウちゃんの親戚でもあり、お母さんのような存在でもある、美里^{みさと}さんだ。

「お久しぶりです。飯倉です……飯倉洗です」

私は、そう答えた。

「あら、ホノちゃん？ 久しぶりね。ちょっと待っててね」

とても明るい、美里さん……もしかして。

しばらくすると、ドアが開いた。前と変わらない美里さんがそこにいた。私の姿を見ると、笑顔で、

「久しぶりね。元気にしてた？」

と言ってくれた。でも、私はそんな美里さんに対し、

「はい」

としか答えなかった。そして、

「あの、ユウちゃんは……」

と美里さんに聞いた。それでも、美里さんは笑顔で、

「悠美なら、今は独り暮らしをしているの。大学に通っているから、近いところに住みたいって言って」

と、教えてくれた。

一人暮らし。やっぱり、美里さん……。

「最近、ユウちゃんから連絡来ました？」

と美里さんに聞くと、美里さんは笑顔を寂しそうな顔にして、首を横に振った。

「電話をしてるけど、出ないのよ。昨日も、行ってみただけど、留守だったみたいで。どうしてるのかしら」

と美里さんは言う。

美里さんは、ユウちゃんがどうなったか知らないようだ。ということは、大学からも連絡が来ていないようだ。

「大学は何日か休んでたんですか？」

「それが分からないのよ。あの子、最近連絡しないし、こっちにも帰ってこないから何をしているのかも分からないのよ」

やっぱり、美里さんは何も知らないようだ。

「今は、どこに住んでるんですか？ ユウちゃん」

私は、美里さんにユウちゃんの住所を聞いた。美里さんは「ホノ

ちゃんなら、会ってくれるかもしれないね」と言って、住所を教え
てくれた。本当に優しい人で、最寄り駅やバス停も丁寧に教えてく
れた。

「また、今度、悠美がこっちに帰ってきたら、遊びにいらっしやい。
また、皆でご飯食べましょ」

と、美里さんは優しく言ってくれた。その優しい言葉が凄く、辛
かった。言えないよ。ユウちゃんがあんなことになったなんて。口
が裂けても言えない……言っちゃいけない。これほどまでに優しい
人が、そんな真実を知ったら、簡単に脆く崩れてしまう。言っちゃ
いけない。言えるわけが無い。

止めたはずの涙が出そうになって、慌てて制御する。駄目だ。早
く、ここから立ち去らないと……。

私は、

「はい」

とだけ答え、美里さんに別れを告げた。「また、今度……」と真
実のような嘘をついて……。

第三話：赤い震撼

何でも思い通りになると思うなよ。

何でも言うことを聞くとと思うなよ。

何でも征服し尽くせると思うなよ。

私は私でしかないし、私は私のみで動くんだから。



美里さんから教えてもらったとおり道に行く。電車を乗り継いで、駅を出たら大学のほうを目指す。すると、明らかに最近建てられたばかりの綺麗なアパートが見えてくる。

「白波荘^{しらなみそう}」という名の、二階建てで六部屋のアパート。そのアパートの二階、二〇一号室がユウちゃんの部屋だと言う。

アパートの前に、駐輪場がある。そこに「片里」と書かれた自転車が一台置いてあった。ユウちゃんの自転車だ。赤い自転車。ふと、前カゴを見ると、鍵がある。赤い鍵。もしかして、ユウちゃんの部屋の鍵かなあ。

それにしても、無用心な鍵の置き方だった。自由に入って自由に物を盗って下さいと言わんばかりの置き方。ユウちゃんがこんな置き方するはずがない。ユウちゃんは几帳面な性格で、整理整頓をしないと気が済まないほどだった。それなのに、カゴに平然と置かれた鍵。犯人が置いていったのだろうか。

その鍵を持って、ユウちゃんの部屋へ向かう。階段下のポストを過ぎ、階段を一段一段上っていく。

プレートには「片里」書いてある。間違いない、この部屋だ。

ドアノブを回してみる。ガチャガチャと言うだけで、開きそうもない。鍵は閉まっているようだ。私は、さっきの鍵を鍵穴にゆっくりと挿した。そして、右に回してみる……あ、逆だ。左に回してみ

た。

カチャリ。

鍵の外れる音。

私は恐る恐るドアを開ける。一瞬にして、鼻の中を生臭さが襲う。これが、血腥いという意味なのだろうか。とても臭い。鉄のさびたような、それでいてドロツとしたような臭い。

ドアを閉めて、靴を脱いであがってみる。犯罪なのは分かっているけど、そんなことを言っている場合ではない。ユウちゃんがどうなっているのが、気に掛かる。

心臓はドクドクと早く脈を打ち、息は上がっている。恐い。恐い。恐いけど、ここに来たからには全てを確認しないと。何のためにここに来たの。全てを知るため、ユウちゃんがどうなってしまったのかを知るために来たんじゃないの？

奥の部屋へ行ってみる。六畳ほどの部屋で、テレビとテーブル、座椅子が置いてある。テーブルの上は綺麗で、物が置いてない。部屋全体を見回してみても、綺麗に整理されている。物は散乱していない。ただ、敷いてあるカーペットは少し寄っている所があり、赤いシミが付いていた。

何を思ったのか、私はそのシミを触ってみた。どうやら乾いているようで、カーペットはゴワゴワとしていた。どうやら、血のようだ。

部屋はもう一つある。その部屋の前まで来て、ゆっくりとドアを開ける。私の心臓はキリキリと痛くなるほどまで鼓動していた。額には暑くもないのに汗をかいていた。

ゴツツ

と、何かがあたる音と、急にドアが重くなる感触。少し力を入れてドアを押すと、開いた。中へ入り、ドアを閉める……。そのときに、ふと下を見た。

そこには、横たわる物。いや、者。白のノースリーブに、肩には傷痕、全身は赤黒いものが付着し、スカート、拳銃の果てにはシヨ

ーッまで脱がされていた。そして、その体の傍らには、黒髪の頭……横顔が見える——ユウちゃんだった。

私は、声を上げそうになった。実際には上げているけど、声が出ないという状態。全てが恐かった。恐ろしかった。あの忌々しい写真と同じ状況（と言っても、胴体は上半身しか見えていなかった）。仰向けに倒れるその胴体と、傍らの頭。ユウちゃんの変わり果てた姿だった。

気づくと、後ろに下がっていた。背中ではドアを密着していた。足はガクガク震えていた。いや、全身が震えていた。吐きそうになる衝動を抑え、失禁しそうになる衝動を抑えるのに必死だった。駄目だ。自分から現状を見ておいて、そんな事になっては駄目だ。自分に言い聞かせ、制御をする。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ……！！

すると、玄関の方から物音がした。

ガタンと。

ドアに付属されたポストに手紙が何かが入れたのだろうか。

とにかく、それさえも恐かった。

私は、部屋から出る。玄関の方へ足早に行き、急いで靴を履き、外へ出る。そして、鍵を閉める。ドアに背中を付け、深呼吸をする。まだ体は震えていた。

——っ！

ふと、誰かの声がしたような気がした。

——けてっ！

誰？

——すけてっ！

ユウちゃん？

——たすけてっ！ ホノちゃん！

……。

——たすけてっ！ お願い……。

知らない間に、震えは止まり、吐きそうになる衝動も、失禁しそうになる衝動もどこかへと消え去った。耳の奥にこだまするユウちゃんの声。気のせいかもしれないけど、確かに聞こえた、訴えかける声。ユウちゃんの声。

助けてあげたい。解放してあげたい。悪いもの全部取り去って、ゆつくりと休ませてあげたい。

震えていた体、動転していた心、拒絶反応が働いていた体、混沌としていた心。全部晴れた。意識は、全てユウちゃんの声に向いていた。そして、バッグの中の——を意識し始める。

そういえば、あの手、どこかで見たような気がする。特に気にしていなかったけど、親指の爪がなかった。あの手。毛深く、大きく……。私の記憶のどこかで引っかかっていた。どこで見たんだろう。どこで知ったんだろう。どこで……。

っ！

思い出した！ あいつだ。あの男だ。あの男がユウちゃんを殺したんだ。

私は、再び、ユウちゃんの部屋に入りあの写真を探した。あるわけがないと思って、ダメ元で探してみた。意外に残っていた昔——

虐待を受けていた頃の写真をはじめ、中学、高校、大学の写真（やっぱり、昔の写真には笑顔のユウちゃんは写っていないかったけど、中学の写真の何枚かと高校、大学の写真は笑顔で写っていた）。その虐待を受けていた頃の写真に、死んだお母さんとあの男が写っている写真を見つけた。ユウちゃん、何でこんな写真を残しておいたんだろう。一番辛いときの写真じゃないの？ 残しておいて何をしようと思ったの？ もしかして、ユウちゃん。あの男に復讐しようと思ってたんじゃないの？

ユウちゃん。わかったよ。助けてあげるよ。ユウちゃんの苦しみを解いてあげるからね。だから、安心して……眠ってね。

全ては、ここで終止符を打ってみせる。

第四話：赤い収監

お前に何がわかる。人を苦しめたくせに。
お前に何がわかる。人を泣かせたくせに。
お前に何がわかる。人を傷つけたくせに。
お前に何がわかる。人を束縛したくせに。
お前に何がわかる。人を死なせたくせに。

□ □ □

「私ね、虐待を受けてたんだ」

と、ユウちゃんからそう聞いたのは、高校二年生の頃だった。昼休みに一緒にお弁当を食べていたときのこと。突然、ユウちゃんからそんなことを言われたから、おかげで唐揚げを一個落としたのを覚えてる。

「虐待？」

「うん。お父さん……って、呼べるのかな……はは……その人に……ね」

「ユウちゃん……」

ユウちゃんは悲しそうで、でも、途中ちよつと笑ったりして（その顔は笑っていると言うよりも、苦笑いだった）、でも辛い事を――やっぱり悲しそうに言った。

「小さい頃、親が離婚して、お母さんが家事をしなくなったの。私、ずっと泣いてばかりいて、いつも怒られてた。『五月蠅い！』って。それで、また泣いて。ずっと、家の外の犬小屋みたいなところにいたんだ」

ユウちゃんは、うつむきながら、そして悲しそうに言った。私は、言葉が出なかった。いつも、明るくて元気を振り撒いてくれるユウちゃんに、そんな過去があったなんて知らなかった。中学三年の途

中からずっと、仲良くしてきたけど、全然そんな感じは無かった。
そして、ユウちゃんは続けた。

「私が小学二年生の頃、お母さんは男の人と暮し始めたの。松田って男の人……最初は遊んでくれたりして優しくて。私は、『松田のおじちゃん』って呼んでたの。でも、段々、私を殴ったり、蹴ったりし始めたの。昼間からお酒を飲んで、学校から帰った私を見ては怒鳴って、殴って、蹴って、拳句の果てには包丁で切り付けられたりしたの」

私はお弁当を食べることも忘れて、ユウちゃんの話に聞き入った。触れちゃいけない部分なんだろうけど、何故か、興味が出てきてしまった。まっていた。

「犯されたりもした……もう、何もかもがイヤになって、全部投げ捨てて、どこか遠くへ逃げちゃいたい思ったの。でも、出来なかった。小さな私には抵抗することも逃げることも出来なかったの」

「……」

「でも、ある日、松田のおじちゃんは居なくなつた。警察の人に連れて行かれた。松田のおじちゃんが連れて行かれたあと、私は児童保護センターに保護されたの。でも、そこも全然楽しくなかった。イヤだった。お母さんは居なくなつて……死んじゃった。中学三年の初めごろかな……ニュースで見たの。お母さんの名前とお母さんの顔がテレビに映ってた……飛び込み自殺だったって……」

何だか、変な気分になつていた。目の前に居る人間であるはずのユウちゃんが、小さな小さな可愛い動物に見えてきて——「守ってあげたい」って気持ちになつていた。

「でも、小学六年生の頃にお母さんの親戚の人が私を引き取ってくれた。片里さんって人なんだけど、とても優しくて。おじちゃんもおばちゃんも、とても私を可愛がってくれて。私、そういう風にしてもらったの初めてだったから、とても嬉しかった。ホノちゃんにも会わせてあげたいなあ。とてもいい人だから……っ？」

——気づくと、

「ホノちゃん？」

——私は、

「どうしたの？ ホノちゃん」

ユウちゃんを抱きしめていた。とても抑え切れなかった感情を一気に出したかのように、目からは涙が溢れ、ユウちゃんをぎゅっと抱きしめていた。

「私が……私が守ってあげるからね……ユウちゃん……」

そんな私を見て、ユウちゃんは

「ありがとう……」

と笑顔で言った。

守ってあげると言っておきながら、こんな結果になってしまった。ユウちゃんはもう、動かない、何も言わない。もう、ここには居ない。変わり果てたユウちゃんが今はいるだけ。

ああ、人間って、こんなにも儚いものなのだろうか。人間の命って、こんなにも脆い物なのだろうか。人間の体って、こんなにも壊れやすい物なのだろうか。人間って何なんだろう。私にはもう、何も理解できなくなっていた。あの状況も、今のこの複雑な心境も。全てを受け入れていなかった——いや、受け入れることが出来なかった。なにも出来ない。

いや、出来る。何かしら出来る。たとえば、ユウちゃんを殺したやつを見つげ出すとか。あいつしか居ないもの。ユウちゃんを平気で殺せるやつは、あいつしか。

私はユウちゃんの部屋で見つけたあいつの写真を。過去に一回だけ見たことのあるあいつの写真を。バッグの中に入れて、思い当たる場所へと足を向けていた。

その場所——ユウちゃんの昔の家。片里さんの家じゃない、その前に住んでいた忌まわしい家。もしかしたらと思い、行ってみたら案の定、当たっていた。その家の表札（と言っても、プラスチックのプレートという安上がりな物）には「松田」と油性ペンで書かれて

いた。

松田——あの、ユウちゃんを虐待していたあの男。私は、一度だけその男を見たことがあった。

——中学三年の冬のある日。朝からユウちゃんの顔色が悪かった。顔面蒼白、体調の悪い蒼白ではなく、何か直面してはいけないことに遭ってしまった時の蒼白。ずっと、うつむいてガタガタ震えていた。

帰りに、「一緒に帰ろう」と言っても、「私用事があるから一人で帰るね」と言つて、先に帰ってしまった。不審に思つて、後をつけてみたら（今思うと、付回すなんて行為は犯罪だ。でも、そのときは今にも倒れるんじゃないかと言つ心配が優先していた）、誰か、男の人と会つていた。

「久しぶりだな——」

低い男の人の声。その声に、ユウちゃんの体がビクツとなる。怯えているようだった。

「何？ 松田のおじちゃん」

その言葉を聞いて、私はハツとした。

あの男が、ユウちゃんを虐待していたやつ。

ユウちゃんと松田はしばらく話をして、どこかへと行つた。後をつけてみると、そこは少し古い家だった。表札には「松田」と油性ペンで書いてあつた——。

まだ、あの男がこの家に住んでいるなら、全てを聞き出してやる。この気持ちは変えられなかった。たとえ、自分が殺されそうになつても、全てを——真相を聞きだしてやる。そして……。

松田の家のインターホンを押そうとしたときだった。ふと、後ろから

「松田さんに何か御用？」

と、知らないおばさんに聞かれた。

「はい」

と私は短く返事をした。

すると、おばさんは、

「松田さんなら、一年ぐらい前に事故で亡くなったわよ」と言った。

「え？」

驚きと絶望とが入り混じった反応は、非常に短く、一般的だった。あまりに強烈な真実を、私は目の前に叩き付けられたことになる。

第五話：赤い転換

深層にありそうで上層な真実。
中心にありそうで腐心な誠実。
熟知していそうで無知な現実。
感泣していそうで無感な虚実。
真実の向こう側の不実な口実。

■ ■ ■

私は声を失った。突然、予想だにしていなかった現実を、目の前に叩きつけられた。

松田が事故で死んでいた？ 一年も前に？ 何だそれは。何かの冗談かと思った。しかし、この真実だけは曲がりもしないし、歪みもしない。

横断歩道を渡っていたとき、左から来たタンクローリーに轢かれたのだという。ただ、この時の犯人は以前捕まっておらず、松田自身が関わってきた、「特殊な団体」の一人に殺されたのではないか。という話が絶えなかったようだ。

それにしても、松田の最後が非常に呆気無さ過ぎたのが腑に落ちない。癪に障る。ユウちゃんをあんなに傷つけたのにも拘らず、タンクローリーに轢かれただけという、あまりに普通過ぎる最後はどう考えても腑に落ちない。腹が煮え繰り返る。

私は、私の心の中で「残酷」という芽が出ていたような気がした。松田の轢かれた時の状況はどうだったとか、苦悶の表情を浮かべていたのかとか、そういう変な妄想が膨らんだ。私は、どうやら壊れてきているようだ。

もしかしたら、それはさっきのユウちゃんを見てからそうなったのかもしれない——いや、それ以前か。出かける際にバッグに——

を入れた時点で、もう私は壊れていたのかもしれない。

どうやら、全ては振り出しに戻ったようだ。あがり直前の「ふりだしへ戻る」を踏んだときのあの悔しさのような——いや、あんなものとは比べ物にならないほどの悔しさが込み上げてきた。果たして真実と言うものが、各人の元へ正常に降り立っているのかを疑った。何のために、ユウちゃんの死体のある、ドロドロとした空気が漂う、あんな部屋へ行ったのかよく分からなくなってきた。

しばらく、私は松田の家の前で突っ立っていた。全ては、ここで終わると踏んでいた為、その後のことを考えていなかったのだ。まさか、こんなことになるとは思ってもみなかったから、次の行動が見えないのである。

ああ、ユウちゃん……ゴメンね。結局、助けてあげられなかったよ……。

「あれ？ 飯倉さん？」

と、不意に誰かに声をかけられた。私は声のした方に振り返る。そこには、一人の女性が立っていた。どこかで見たことあるような顔……。

「平川さん？」

平川さん。ひしかわはな平川華さん。私と同じ高校に通っていた。背の高い女の子。

私は、あまり平川さんとは話をしたことが無かった。どちらかと言うと、ユウちゃんと仲が良く、私と話をしていないときのユウちゃんは大抵、彼女——平川さんと話をしていた。もちろん、ユウちゃん是他の子とも仲がいいし、男子ともよく話をしていた。

約二年ぶりに平川さんを見たけど、あまり変わっていない。

久しぶりに会ったということで、近くの喫茶店で話をすることにした。

喫茶店は、店内が明るい感じで、それでいて掛かっているレコードはいかにも古そうな曲。マスターは髭の似合う初老の男性。にこやかでとても温厚そうで、髭を生やしている割に可愛い人。そ

して、店内に漂うコーヒーのいい香り。今日、初めて落ち着くことが出来そうだった。朝起きて、すぐにあんなメールが届いて、すぐに出かけたから、落ち着く余裕なんて無かった。

私はカフェオレを、平川さんはコーヒーを注文した。可愛いマスターが「ちよつと待っててね」と言っ、調理場に戻る。

「久しぶりだね」

「二年ぶりってとこかな？」

と、久しぶりに会った人たちがするような会話から始まった。

「平川さんは、今何やってるの？ 就職？」

「私、家が花屋なのね。だから、今はフラワーアレンジメントの勉強をしてるの」

「へえ。じゃあ、専門学校が何かに？」

「うん」

平川さんとこんなに話をしたのは初めてかもしれない。高校のときは、滅多に話す機会が無かったし、共通点言えば、よく話をする相手がユウちゃんだったということだけだ。

「ところで」

平川さんが、突然話を変える。

「飯倉さん、あそこで何をやってたの？」

「やっぱり来たか、その質問。聞かれるとは思っていたけど……」

「……」

仲良くしていた平川さんに、言い辛い。ユウちゃんが死んだなんて言い辛い。彼女、どれだけ悲しむだろう。何とか、有耶無耶にしたい。

「前に、あそこに知り合いが住んでたんだ」

「悠美ちゃんでしょ？」

ズバリと当てられた。そりゃあ、よくユウちゃんと話をしていたから、前にあの家に住んでたことぐらい聞いているはず。普通に言えば良かった。

「あそこにいたのは本当に偶然だったの。そういえば、この家、ユ

ウちゃんが前に住んでた家だったって聞いたことあるなあって思ってた」

と、口から出任せを言った。最近、本当に嘘をつくことがうまくなってる。自分の制御をうまくしないといけないのにな。

すると、

「お待たせしました。カフェオレとコーヒーね」と、マスターが注文した物を持ってきた。私はカフェオレを一口飲んだ。甘くて美味しい。

「そういえば、飯倉さんと悠美ちゃんって、よく話をしてたよね。結構仲良かったの？」

平川さんがコーヒーを一口飲んだ後、聞いてきた。

「うん。中学三年から話し始めて、そこから友達になったの」

「へえ。中学も一緒だったんだ。じゃあ、悠美ちゃんからいろんな話を聞いて来たわけだね」

暫しの沈黙。

「じゃあ、悠美ちゃんの過去も？」

平川さんの顔が一気にきりつとした。凜々しい表情。だけど、その奥には悲しみが潜んでいた。

私はこくと頷いた。声には出さずに。

「私、悠美ちゃんと仲良くなったのは高校二年からんだけど、いろいろ悠美ちゃんから聞いたの。昔、虐待されてたこととか、児童保護センターにいたこととか」

平川さんもユウちゃんから、過去の話を知りたいらしい。その内容は優ちゃんが私に話してくれたことと同じ物だった。ただ、

「親戚の人に引き取られる前の名前が戸田優美って、全然違う名前だったのよ」

とか、

「児童保護センターで保護されたときにも、酷い事があった」

など、私が知らない内容が飛び出した。

保護センターにいたときも「イヤだった」とは、聞いていたけど、

酷い事があつたということとは聞いていない。もとより、前の名前を知らなかった私にとって、驚きとちよつとした嫉妬心があつたのは言うまでもない。

「保護センターにいたときの酷い事って？」

私が聞くと、平川さんはハツとした表情をした。平川さんって結構口軽いほうなのかもしれない。内緒事をぼろつと喋っちゃうような、そんな感じ。

「あ……。まあ、飯倉さんも悠美ちゃんから結構、そういう話を聞いているから、話しても大丈夫かな」

平川さんはそう言うと、

「保護センターで保護されたとき、悠美ちゃん、なかなか周りの子と馴染めなかつたんだって」

と語り始めた。

「そこで、不破^{ふわ}って言う保護センターの職員の人に遊んでもらってたんだって。一人じゃあ可哀想だからって。でも、その不破^{ふわ}って男、まだ小学生だった悠美ちゃんを……」

また、暫しの沈黙。

まさか。

「……犯してたんだって」

……。保護された先でも、松田と同じようなことをするやつがい——不破。当時二十四歳。

何のための児童保護センターなのか、子供を守り、育てるための親的存在の施設じゃないのか。何故、心に傷を負った子の傷をさらに深めるようなことをしたのか。

私の中で、怒りと憎悪とが入り乱れた。

帰り際、平川さんに聞かれたことがあつた。

「悠美ちゃん、今何やってるか知ってる？ 卒業してから全然連絡とってないから、今どうしてるのかなって」

私は、その質問に対して。

「元気にしてるよ。大学にも通ってるんだって」と、嘘をついた。

全く、本当に嘘をつくことがうまくなって困っている。

第六話：赤い補完

缺で切られた糸をまた繋げてみてください。

——簡単じゃないですか。

どうするのです？

——切られた糸と糸とを結べば良いんじゃないですか。

□ □ □

平川さんがユウちゃんから聞いたことが本当であるとするならば、私はとんでもない思い違いをしていたことになる。別に松田がユウちゃんを殺した犯人だったとして、奴が死んでいようが生きていようが、最終的には同じ末路へと送ってやるつもりだった。だけど、安息の地で地獄と言うものをユウちゃんに与えた者がいたとは誤算だった。

ふわともゆき
不破朋之。当時二十四歳の男が、ユウちゃんを黽り毎日のように地獄を見させていたという。ユウちゃんは当時十一歳。未成年者に対する性行為は、相手の同意を得たとしても犯罪である。それ以前に、同意が無かったと言うことでは強姦罪になる。
なんて男だ。

平川さんと別れてから、私の怒りは沸々と沸き、腸は既に煮え繰り返っていた。何としてでも、不破の居場所をつきとめ、事の真相を聞きだしてやる。そう決心していた。今日、二回目の決心である。一回目はユウちゃんが殺されたことに対する真相をつきとめること。二回目は不破が過去に犯した罪に対する深層を聞き出すこと——いや、三回か。もう一つの決心は——。

——不破の犯した罪が事実だった場合に、奴に鉄槌を下すこと。
犯罪なのは分かっている。傷害罪、殺人未遂罪、殺人罪……何が適用されるかは分からないが、おそらく傷害罪にはなるだろう。私

の中では、その三回目の決心は曲げられない物になっていた。

もう、自分でも歯止めが利かないほどに、無意識に動いていた。

平川さん曰く、「不破は一度、片里さんの家を訪れている」とのこと。

私は、再び片里さんの家へ行くことにした。

足は無意識に、自分の理性は正常だと自分に言い聞かせながら、電車を乗り継ぎ、片里さんの家へ行く。どれほどのスピードで片里さんのところへ向かったのかは知らない。

私の家と松田の家とでは、片里さんの家が丁度、真ん中の位置に存在している。電車の走行距離もほぼ一緒（あくまで、この情報は後で調べたことだったが、それをはじめて知ったとき何故か、自分の中では悔しさが溢れていた）。だから、所要時間はほぼ同じになるはずだったが、約十五分ほどの時間が短縮されていた。無意識だったが、足早に、もしかしたら走って片里さんの家に向かっていったのかもしれない。

片里さんの家のインターホンを押す。今日二回目だ。

「はい」

美里さんの声が聞こえる。

「あの、度々すみません……、飯倉です」

ああ、迷惑しているだろうなあ。そう、思ったのだが、

「あら、ホノちゃん。どうしたの？」

と、美里さんは優しく返事をした。

「一つお尋ねしたいことがあります」

私は、そういった後、一息おいて静かに言った。

「不破と言う男について聞きたいんです」と。

「不破……？ ああ、保護センターの人ね」

美里さんはしばらく間を置いて、思い出してから反応した。どうやら、不破が来たのは結構前のことらしい。

「あの……」

と、言い出そうとしたら、ガチャリと音がした。インターホンを切られたらしい。美里さんの反応とは打って変わった状況に、少し戸惑った。だが、

美里さんは玄関まで出てきてくれた。そして、

「ちよつと上がってらっしゃいよ」

と、手招きして私に上がるように促した。

私は「はい」と短く返事をして、片里さんの家へ入っていった。

玄関で靴を脱ぎ、リビングに通された。

ああ、懐かしい。久しぶりに着たけれど、物の配置は全く変わっていない。

「ごめんなさいね、散らかってて」

と、言う割には綺麗に片付いている。私の家とは大違いだ。

「今、お茶を入れるから座って待っててちょうだい」

美里さんはそういうと、台所の方へと行った。

凄く聞きづらくなってきた。そもそも、美里さんは変に思っていないのかなあ。突然、ユウちゃんの住所を聞きに来て、しかもそんなに時間が経っていないうちに、今度はユウちゃんのことじゃなくて、かつて、ユウちゃんがいたところの人間についてを聞きに来たのだから、少しは疑問に思うだろう。しかし、全くそんな素振りも名なく、美里さんはお茶を持ってきてくれた。

美里さんは座って、ふふつと笑った。

——しかし、苦笑いだ。

「不破さんについては、悠美から聞いたのね」

美里さんは、私を見て聞く。

「はい。高校二年のときに……」

「何で会おうと思ったの？」

「保護センターでよく遊んでもらったということを知っていましたし、優しい人で、今度会あわせたいって言ってましたから。悠美ちゃんを誘って、その不破さんに会ってみようかと」

「なるほどね。じゃあ、教えてあげるわ」

美里さんは、メモ帳とペンを持ってきて、不破の住所を書き始めた。それにしても綺麗な字を書く。

——！？

そんなっ！

そんな馬鹿なっ！

美里さんがメモ帳に書いた住所に私は驚愕した。

——白波荘一〇一号室。

不破は丁度、ユウちゃんの部屋の下に住んでいたのだ。もしかしたら、犯人がすぐ近くにいたのかもしれない。

私は、ユウちゃんの部屋での出来事を思い出した。

ユウちゃんの死体を発見したときに、突然玄関のほうで物音がしたのを。

あれは、ポストに郵便物が入った音じゃあない。よく考えてみれば、あのアパートのポストは階段のところにもとめてある。ドアにポストが付いているタイプではなかった。

では、あの時の物音は何だったのか。

——不破だ。不破が部屋を確認しに来たんだ。ドアノブを回してみたら、鍵が開いていた。その時に、中に入らなかったのは自分の姿を見られないようにするためだ。不用意に行つて出くわしたときに、対処に困るからだ。殺せば全て済むが、証拠を隠滅する計画を練っていない分、檻ほろ褌が出る。

「どうしたの？ ホノちゃん」

美里さんに呼ばれて、ハツとする。

「あ、いえ」

「はい。ここが、不破さんの住所。でも、面白いわよね。悠美と同じアパートに住んでいるだなんて。なにか、運命的なものでもあるんじゃないかしら」

運命的なもの。

それは、殺す側と殺される側がほんの少しの距離に位置してしまう運命。

いや、これは運命なんかじゃない。

全ては、不破の計画だ。

全ては、不破がユウちゃんを侵して冒して犯すための計画だ。運命なんて、そんなロマンチックなものじゃない。

帰り際。私は、

「ありがとうございます」

と、美里さんにお礼を言った。

「そんな、とんでもない。悠美と仲良くしてもらってるだけでも、私たちにとっては十分嬉しいことなんだもの」

美里さんは、笑顔でそう言った。

「それじゃあ、失礼します」

私が去ろうとしたとき、

「ホノちゃん」

と呼び止められた。そして、

「悠美に、『今度こっちに帰ってきて、顔を見せて』って言うておいてちょうだい」

と言われた。

私は、

「ええ、言うておきます」

と答えて、片里さんの家を後にした。

第七話：赤い折檻

赤い固体を「恒常」がむさぼる。

赤い液体を「恒常」がすする。

赤い気体を「恒常」があびる。

赤い個体を「恒常」がつらぬく。

赤い疫体を「恒常」がはらう。

赤い期待を「恒常」がぶちこわす。

■ ■ ■

「白波荘」へ来るのは今日、二回目。

一回目はユウちゃんの部屋。

二回目は不破の部屋。

今、私は不破の部屋の前にいる。このドアの向こうには不破がいる。あいつは絶対に部屋にいる。私がユウちゃんの部屋に入ったときを除いて、絶対、あいつは一步も外には出ていない。

事が露見するのを恐れているのだ。部屋にいれば居留守が使える。いない振りをする事が出来るし、最終的には朽ち果てることも出来るし、自分で自分を殺すことだって出来る。そもそも、ユウちゃんの首を切り取っておいて死体をそのまま放置するあたり、臆病者が余程の計画を立てたものの犯行（不破はわざと、ユウちゃんと同じアパートに住んだが、それはあくまで自分の物にするだけに過ぎない幼稚な計画）だと言うことが分かる。写真にとって見たのは、臆病者が人を殺した優越感と言うか達成感と言うか、調子に乗ったついでで撮ったに過ぎない。私の元へ送ったのは、電話帳で一番に名前が来るからだ。

「いいくらほのか」。ユウちゃんは電話帳登録のとき、フルネームで登録する。一度、電話帳を見せてもらったが、「あ」の付く人

の登録は無く、「い」の「いいくらほのか」——私が先頭に来ていたのを覚えている。

私は、周りにいる人からも分かるのではないかというほど、怒りをこめていた。目は睨み、口は笑い、肩は上がり、手はバッグの中にある「恒常」を握り締めていた。

片方の手でドアをノックする。

コンコン——いや、擬音にするならゴンゴンがあっているかもしれない。

一つ一つの行動に憎しみと怒りがこめられているのが自分でも分かる。さつきから、制御が効かないだの何だのと口走っているが、糸が一本になったところで、私は自分を制御することが出来た。制御と言っても制止するほうではなく、ゴーサインを出すほうの制御。完全にスイッチは入っているのだ。

……。

中から、返事も無ければ物音もしない。

私は、ドアノブに手をかけ回してみた。鍵は開いている。少し開けたドアの隙間から。

「不破さん！？」

とわざと大きな声を出してみる。

「いらつしゃいませんか——！！？」

声にはやはり、憎しみと怒りがこめられている。部屋の中にかすかに響く私の声。

——かたり。

と物音がしたのを私は聞き逃さなかった。

「不破さん！？」

再び私は、あいつを呼んだ。さん付けしたくない。

「不破！」

思い切って呼び捨てにしてみた。こちらのほうが憎しみと怒りがこめられているように聞こえる。

「いるんだろ？ お前はこの部屋の中にいるんだろ！？」

私は、あまりに反応が無い不破にキレた。

「いい加減にしろ！ お前は一人人間を壊しているだろう？」

「……」

かすかに人の気配がする。やはり不破はこの部屋にいた。

「わかったよ……」

奥のほうで、低い声が聞こえた。どうやら不破らしい。

足音が聞こえた。こちらに向かっているらしい。

「あまり怒鳴らないでくれ。頭が痛い」

こちらに向かってくる長身の男。不破は痩せ型で身長が高い。髪はぼさぼさとしていたが、眼鏡をかけた顔立ちは整っていた。

「お前に、そんなこと言う資格なんか無い」

「何故？」

「人を壊しているからだよ」

「？ よく分からないなあ。俺が人を壊してるって？」

不破は呆れたように言い返す。その様子に私のほうが呆れ返りそうだった。

「お前、片里悠美——いや、戸田優美って女の子、知ってるよな？」

明らかに女が使う口調ではない。

「——！？」

私の質問に反応する不破。

「そつだよ。虐待を受けて、児童保護センターに小学六年生まで保護されていた——お前が犯した子だよ！」

「——止める……!!」

不破は、私の言葉と重なるように怒鳴った。しかし、その怒鳴りにも私はたじろぐ事は無かった。

「知ってるよな？ お前の上にその子が住んでいることは」

不破はうつむいている。

「こつちを見る！ 私の目を見る！ ちゃんと——私の目を見て全てを話せ不破！」

不破はやはりうつむいたままだ。少し顔を上げるそぶりは見せた

ものの顔は伏せている。

「戸田——ユウちゃんの携帯を使って、私に写真を送ったろ？」

不破はチラリとこちらを見た。

「ああ、君が飯倉か」

とぼそぼそと言った。

「そうだよ。お前が壊したユウちゃんを見た奴だよ！　それが私だ！」

自分で何を言ってるのかわからなくなってきた。

「お前、一度ユウちゃんを引き取った片里さんの家に行っているな。何故行つた？」

「……を聞くために」

「聞こえねえよ！……！！！」

私はドアを叩いて怒鳴った。もう、この私は私じゃない。他の誰かだ。そう思えるほどに、憎しみと怒りに満ち溢れていた。

「住所を聞くためだ……」

「ユウちゃんの部屋のな。そして、お前はユウちゃんの部屋の下が空いていることを調べ、そこに住むことにしたわけだな。何故そうした？」

「優美ちゃんのことを忘れられなかったんだ」

「意外と素直だな。じゃあ、あと三つほど質問する。ちゃんと答える」

不破はうつむきながらも頷いた。

「まず、一つ。お前は保護センターにいたときに、そこで会ったユウちゃんを犯したか？」

コクリ。頷き。

「二つ目。何故、殺した？」

不破はピクリと反応した。否定でもするか？

「最初は……殺すつもりなんてなかった。本当は謝るつもりだったんだ」

「謝る？　犯したことをか？」

「ああ、忘れられなかったのはあの時の罪悪感からだ。ずっとずっと後悔してたんだ」

「それで、下の部屋に住み、いつでも謝れるようにしていたんだな？」

「ああ」

「じゃあ、何故殺した？」

「謝ろうと、優美ちゃんの部屋に行ったんだ。そしたら、顔が青くなって、後ろへ後ずさりして、ガタガタ震え始めたんだ」

「そりゃあ、そうだろう。過去に犯された経験があるんだから、恐怖心ぐらい植えつけられているだろう。」

「しばらくすると、優美ちゃんは奥の台所へ行って、包丁を持ってきたんだ」

「ユウちゃん。この男を殺すつもりだったのか。まあ、こんな男に生きる価値なんてないけど。」

■ ■ ■

「出てって！」

悠美が包丁を握り締め、その切っ先を不破に向けている。

「おい、止めてくれ。俺は謝りに来ただけだ」

「謝る？ 今更？」

「ああ、遅くなっちゃったけど……」

「ふざけないで！ 今更謝りにきて、私にどうしろっていうの！？ また犯す気なの！？ 片里のおじさんのところへ引き取られてから、もう会うこともないだろうって思っていたのに！ 恐くておじさんにもおばさんにも相談できなかったけど、もう会わないって分かった時点で凄く喜んだのに！ 今になって、あんたに会うとは思わなかったわよ！！」

言葉が不破に突き刺さる。

そして、不破は悠美に近づいていった。

わってしまった後だった——しかし、何故か人を一人殺したと言う、達成感。臆病だった自分が一人殺したという変な勘違いが生まれていた。

不破は自分の部屋に戻り着替えようとした——普通の理性。

しかし、それよりも先に手にしたのは鋸だった——異常の理性。

その鋸を手に持ち、不破は再び、悠美の部屋に入っていた。

悠美の首と胴体を切り離し、近くに落ちていた悠美の携帯を見つけて、その頭を撮り——洸の携帯へと送信した。

その後、不破は部屋に戻り、それから服を着替えた。

■ ■ ■

「——なるほど」

私は、この一部始終を聞いて呆れた。

「じゃあ、三つ目の質問——」

私はうつむいた不破の髪を驚づかみにし、無理矢理顔を上げた。そして、

「同じようにして欲しいか？」

と言った。

不破は私の手を払い、後ずさった。

私はバッグの中から「恒常」を取り出した。

不破はガタガタと震えていたが、私は返答を待たずに「恒常」を。

——不破の腹部へとうずめ、突き破った。

第八話：赤い終刊

疲れた。帰って寝よう。

浸かれた。還って寝よう。

□ □ □

気づくと、私は家の近所にある公園にいた。ベンチに座ってずっと下を向いていた。時折、小さな子供が私の顔を覗き込んで、自分の母親の元へと駆け足で戻っていく。ここは平和だ。何に於いても汚されることのない平和がここにあった。ここにポツンと座っている私以外。

不破を刺した。「恒常」——ナイフで刺した。不破の腹部からは赤い赤い血が出て衣服を汚し、衣服が含みきれなかった血は床に広がっていった。

刺したあと不破はしばらく座っていたが、腹部の痛みが限界を超えたのか、腹部を押さえて蹲った。しばらくは「うう」と痛みによる嗚咽が漏れていたが、十何分か過ぎたあたりでその嗚咽も聞こえなくなり、終に不破は動かなくなった。

私の混沌から生まれた怒りと憎しみによる裁判は終結した。全てがここで完了した。やることを終えた私は抜け殻同然になり、トボトボと歩いていた。普通なら、不審者として警察に通報されるが、何故か家の近くまで歩いて来れた。よく見てみれば、私の顔や手、衣服には不破の血が一切付いておらず、端から見れば「アルバイト帰りの疲れた子」に見えたのだろう。

赤い写真から生まれた赤い混沌と、それに続く赤い憎悪と赤い激怒。そして、犯人に対する赤い裁判、赤い制裁。「赤い混沌と赤い裁判」。それを思いついたとき、何故か「ふっ」と吹き出して笑っ

てしまった。

一日が長くて短く、短くて長く、どう捉えていいか分からない時の流れに私は疲れてた。疲れ果てた。

先ほど、直接公園に来たような感じで言っていたけど、実は不破の家を出てから一回家に帰った。「恒常」の荷物を置いたためだ。と言っても、ナイフは不破の腹部に刺さったままなので、実質帰って来たのは一つの「恒常」——あの忌まわしい画像がまだ入っている携帯電話だけだった。あの画像を消そうかどうしようか迷っていたけど、結局は消さずにそのままベッドの上に放り投げた。

あの画像が脳裏に浮かぶたびに、生きていた頃のユウちゃんを思い出す。いつも笑顔を振り撒いていたユウちゃん。あのユウちゃんの笑顔がずっと忘れられずにいた。たぶん、それは忘れちゃいけないことなんだと思う。

ユウちゃんの部屋に行ったときに聞こえたユウちゃんの声。「助けて」という声。その声に応えて私が今日やったことが十分だったのか、やりすぎだったのかわからない。もし、ユウちゃんが生きていたとして、実際にその結果をユウちゃんに伝えたときにユウちゃんがどういう反応をするのか。喜んだのだろうか、怒ったのだろうか、悲しんだのだろうか……。わからない。

——たぶん、殺しちゃいけなかったんだと思う——
と、ふと声がした。

私は顔を上げた。

目の前には……ユウちゃん。何で？ ユウちゃんがここに？

——あの男を自主させるだけでよかったんだと思う——

でも、ユウちゃん、助けてって。

——確かに、私は「助けて」ってホノちゃんに言ったけど、私はあの男に自分の侵した罪を償って欲しかったの——

え？

——生きて、一生懸命償って欲しかったの。過去に私を犯したこととかを——

そんな……。じゃあ、私がしたことって何だったの？

ユウちゃん！ それじゃあ、私……ただの……。

もう、ユウちゃんの声はしなかった。

私はユウちゃんの言ったことを間違えて解釈していたらしい。生かせて罪を償わせる。死んだらあっさり、その罪からは死んでからも言われるが、現実的には逃れられる。生きていれば一生そのことを言われ続ける。死んでからもそう言われる。どっちが辛い？ 生きて罪を償わせたほうが辛い。自分の侵した罪の重さを感じることが出来る。

私はなんてことを……。

ごめん……ユウちゃん。君を裏切っちゃったよ。

私は立った。そして、再びトボトボと歩き始めた。

この公園は私の家の近くにあるのと同時に、とある川に近い。

その川は「田柄川^{たがらがわ}」といい、結構澄んだ川。けれども、その川は大きく深い。大人でも足が付くのがやっとと言うほどの深さだ。けど、私は身長が低くその川へ入れば完全に私は頭の天辺まで浸かることが出来る。

川の方へ歩いていく。足取りは何故か軽い。一步一步確実に川の方へ向かっている。

草を掻き分けると、そこには波消しブロックがゴロゴロと転がっている。私はそこへ座った。

私は人を一人殺している。一人の人を殺した人を殺した。その人を殺すときは悪魔を殺すような感じに思った。けど、今は冷静に一人の人を殺したと判断できる。つまり、とんでもないことをした。取り返しの付かないことをした。自分の人生に傷をつけた。もう、誰にも顔向けできない。

私は履いていた靴を脱いだ。チャポンと靴が川に入り沈んでいく。靴は川の流れに乗って下流へと進んでいく。今日の川はちよつと速

いみたいだ。

私はその川へ入った。なるべく水の音がしないように。やはり私の頭の天辺まで確実に浸かる。その川の中で私は静かに目を瞑った。

思ってみれば、私の人生って一体なんだっただろう。

いつも、ユウちゃんに元氣付けられて、ずっと辛い思いをしてきたユウちゃんに助けられて。それでいて、私はユウちゃんに何をしてあげられた？ 守ってあげられた？ いや、守るどころかユウちゃんを傷つけた。私の生きてきた道には汚点ばかりが残った。綺麗な部分なんてこれっぽっちもない。

私は、ユウちゃんのいるところには行けないけれど、私は私なりに頑張っていくから。もう、ユウちゃんの助けを借りないように頑張るから。だから。

もう、心配しないでね。

ユウちゃん。

ごめんね、ユウちゃん。

ありがとう、ユウちゃん。

そして――

おやすみ、ユウちゃん。

第八話：赤い終刊（後書き）

ご閲覧、有難う御座いました。久しぶりの長編でした。多々、至らない点が見られると思いますが、どうか勘弁してやってください。

それでは、皆さん。

またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512e/>

赤い混沌と赤い裁判

2010年10月8日15時28分発行